

社会と人間（４）

マルクスの歴史社会学
＜ウェーバーとの対比＞

山 田 隆 夫

部族的所有について

1. 『ドイツ・イデオロギー』は、マルクスとエンゲルスの初期の共著であった。この著書のなかで、彼らは、『生産様式』の概念を導入してきた。『序言』と『ドイツ・イデオロギー』のなかでは、生産様式という概念は、生産力と生産関係という二つの概念を、そのうちに含んでいる。

生産力

- a. 生産者たち自身の社会的協業
- b. この社会的協業は存在する生産用具によって条件づけられている
- c. 役立っている技術的知識
- d. 社会の自然的環境

生産関係

生産関係は、財産関係あるいは所有の形態に関係している。それゆえ、生産諸力[・]は一つの社会[・]がその生計と生産物をどのよう[・]に生産するかという問題である。生産関係は、社会の生活資源を誰が所有しているか、誰が管理しているかという問題である。

2. さて、『序言』から、人はつぎのような印象を与えられる。マルクスは、現存する生産関係を促進する生産力の内面的なダイナミズムにだけ、社会変動のキイを探究したというのである。しかし、マルクスの他の著書を読

むとつぎのことがはっきりしてくる。社会変動のキイを生産力の内面的なダイナミズムにだけ、マルクスが探究したのではないということである。たとえば、『ドイツ・イデオロギー』で、マルクスはつぎのように書いている。社会の内部構造の全体は、社会の生産が到達した発展の段階とその内的そして外的相互作用の段階とに依存しているということである⁵さらに、マルクスは、最初の所有の形態を、「部族的 (tribal)」所有と明示している。これは、原基本的な分業と同時に起こる形態である。彼は続ける。

「それゆえに社会的編成は家族の延長以上には出ない。すなわち家父長制的部族長、そのもとに部族員、最後に奴隷。家族のうちに潜在している奴隷制は人口と需要の増大につれて、また戦争と交易といった対外的交通のひろがりにつれて、はじめて徐々に展開する。」⁶ (③ 18 頁)

傍点の章句は、あとで探究する。この章句は、マルクスにもエンゲルスにも、奴隷制の発展のような重大な社会変動は、生産力の成長の結果とただけでは——あるいは他の何らかの唯一の内面的要因だけでは説明することはできないことは疑いの余地がなかった。

3. マルクスはこの問題について、『ドイツ・イデオロギー』(1846)と『序言』(1859)の執筆の期間中は、ともかく考えを変えなかった。彼の主要著書である『資本論』の草稿をなす『要綱』(1857～58)をとおして、マルクスは、外的な諸条件に適切な関心をはらった。マルクスの議論は、遊牧民族であろうと、農耕民族であろうと、アジアの草原のそれであろうと、アメリカのインディアン部族のそれであろうと、適切な例であった。マルクスは書いている。

「共同体」が(定住した民族に議論を飛躍すれば)共同体自身の財産である、生産の自然的関係(土地)において遭遇するはずである唯一の障害は、他の共同体である。他の共同体は、すでに、その土地を自分自身の構成要素と考へて権利を主張するからである。戦争はそれゆえこれら共同体の彼らの財産の防御のためにも新財産の獲得のためにも自然に発生した共同体

の最初の仕事の一つであった。」⁷。

そして、マルクスは続けている。

「人間が、それ自体がその有機的付属物として土地や土壌とともに征服されると、そこでは、彼らは生産の一条件としてやはり征服される。そして、このやり方で、奴隷制と農奴制とが発生する。このことがやがて、あらゆる諸共同体の原基的な形態を頽廃させ変形させてしまう、そしてそれ自体が、基礎となってしまう」⁸

いうまでもなくマルクスは戦争と略奪が、奴隷制の十分な説明であると示唆していると考えたのではない。事実、マルクスは猛烈に、その意味でうけいれられている意見に反対したのである。そして読者に留意するようにうながしたのは、奴隷制もまた一定の経済的条件を前提しているということである。彼は書いている。

「略奪が可能であるためには、略奪されるべきものがなければならない。つまり生産がなければならない。そして略奪の様式は逆に生産の様式によって規定される。奴隷を盗むことは直接に生産用具を盗むことである。しかし、奴隷が盗まれる地主の生産は奴隷労働力を見越して構築されなければならない。あるいは（南部アメリカ等のように）奴隷に対応する生産様式が造りだされなければならない」⁹。

そこで、生産様式は、奴隷制が当該社会でどのように、なぜ発生してきたか、あるいはなぜ他の重大な変動がその内部に発生してきたのかを分析する基本的な要素である。しかし、生産様式の完全な検討でも、この答えを出すのに成功しないであろう。「たとえば、農耕民族が最終的には定着するとき、どの程度、このもとの共同体が変形するかは種々の外的、気候的、地理的条件に、また同様に彼らの特殊な自然的特質——彼らの氏族の性格に依存するであろうからである¹⁰。」このことは、人が理解している——要因決定主義とはほどとおいであろう。

4. われわれは、表面をひっかきまわしてきたにすぎない。というのは、マルクスとエンゲルスは、社会と制度の分析において、自らを経済的条件にだけ限定してこなかったという事実を証明することになる多くの証拠がある。エンゲルスは、有名な論文『マルク』のなかで、原古ドイツの農業条件の歴史の描写を与えている。カエサルやタキトゥスの著書に立脚して、エンゲルスは、ドイツの氏族の共同体的土地所有の最初の形態を述べている。これらの移住してきたドイツ人の大部分は、彼らの土地を共同で耕したのであって、そこには彼らは暫時定住した、しかしながら、世襲的な、私的所有は、彼らの間では、最初から存在していた。エンゲルスはこの事実をどのように説明しているのか?彼は次のように書いている。

「最初に個々人の私有財産になった地所は、宅地であった。あらゆる人格的自由の基礎である住居の不可侵性は、遊牧地の天幕車から、定住農民の丸太小屋に移り、しだいに家屋敷地にたいする完全な所有権に変わった。¹¹ タキトゥスの時代にはすでにそうになっていた。自由民のドイツ人の屋敷地は、すでにその当時にマルクから除外されていたにちががなく、したがって後世のマルク法 (Markordnungen) や、部分的にはすでに五世紀ないし、八世紀の部族法典にも記載されているように、マルクの役人の手のとどかない場所 (Innaccessible), 逃亡者にとって安全な避難場所となっていたにちがいない。なぜなら、住居の神聖は、住居の私有財産になったことの結果ではなく、その原因だったからである。¹²」(⑩ 313-314 頁)

マルクスとエンゲルスはいつも観念を経済的あるいは物質的条件から派生したものであるという申し立てについてはこれくらいにしておきたい。

5. さらに、王 (Kingship) がゲルマン人の間に発生した。「従士団 (retinues)」の存在によって与えられた一つの傾向であった。初期には、ゲルマンの部族のあいだに軍統帥者が、その軍事的能力にもとづいて選ばれていた。同時に、しかしながら、軍統帥者は「従士団」を組織した、すなわちこれは、軍事的な技術を基礎に集められた私的な戦闘部隊であった。(⑫ 146 頁) 種々の氏族と部族から動員された若者たちは略奪に熱中する従士

団 (retinue) に結合した。彼らは近隣の諸集団の急襲で戦利品を手にいれた。略奪品は——まず、家畜、奴隷、宝石は——従士団メンバーの私有財産になった、共有の氏族財産にはならなかった。こうして、氏族内で貧富の差が増大した。当時存在していた民主的・共同的なゲルマンの社会の性格を容赦なく弱めていった。エンゲルスは、つぎのように観察している。

「ここから、従士団 (retinues) は、古来の人民の自由の萌芽であって、民属大移動のあいだやそのあとで、まさにそういうものであることを実証した。というのは、第一には、それは王権の勃興をうながしたし、第二には、すでにタキトゥスが指摘しているようにたえまない戦争と略奪出征とによってのみ、その結束をたもつことができたからである。いまや略奪が目的となった。従士団の主君は近くになにも仕事がないと、戦争をやっていて分捕りができそうな他の部族^{フオルク}のところへ、部下を率いて出征した。……ローマ帝国が征服されたあとで、諸王のこのような従士たちが、不自由人であるローマの廷臣とならんで、後世の貴族の第二のおもな構成部分となった。」¹³ (② 146 頁)

エンゲルスにとって、ゲルマン人の私有財産は、いくつかの条件に由来していた。

① 家族の住居を神聖・不可侵として取扱う古代ゲルマンの大移動中に発生したこの慣習は、彼らが定着したときには私的な農耕地へと進んでいった。

② ローマの影響である。ローマ帝国領土を彼らが征服することで、ここでは、土壌は数世紀のあいだすでに私有財産であったのでゲルマン人は、この「制度」を借りてきたのである。

最後に、そこに「従士団」があり、これは永久的になっていて、氏族をこえた混成の構造になっていた。従士団が戦闘する場合にも彼ら自身の親族の青年たちが相たずさえてではなくて、仲間の従士の戦士たちが相たずさえて戦闘するのである。従士団は、正当に選出された軍事統帥者よりむしろ、彼ら自身の指導者に従い、命令をまもった。これはやがて重大な社会変動に進んでいったのである。

6. 初期ゲルマン人のあいだには、多くの原始的農業社会と同じように、耕作は典型的に婦人の仕事であった。一方、男子は、狩猟をし、畜牛のような家畜の世話をした。しかし、馬が引くすきの導入とともに、農耕とその他の農場での重労働の諸形態もまた男子に移行してしまった。従士団、家臣団の成長は、しかしながら、古い慣行への逆転の原因になってしまった。青年たちは戦争と略奪に従事し、婦人、老人、子供たちは家の経営にあたるようになった。青年たちは、生産との結びつきをうすくして、そして戦闘が取得の主要な方法になっていった。タキトゥスの時代までには、従士団のメンバーは、実質的な家畜の群を獲得し、彼らの奴隷によって作りだされた農産物を受けとった。富の源泉である戦利品へ依存することがふえてくるので、従士団のあいだに、農業労働にたいする軽蔑が発生してしまった。この労働は、ますます婦人、子供、奴隷に残されてしまった。こうして、カエザルとタキトゥスまでの 150 年の間に、従士団、廷臣団が進化していったところのものは、いくつかのやり方で、古い共同体的諸制度を掘り崩すことであった。

■軍総帥者は、同族の男子や、氏族の戦士の集団の統制からも独立してしまった。

■従士団、廷臣団の指導者は、君主と貴族とになり、その蓄積された富と権力は彼らの同族の男子たちの上に彼らを位置づけた。

■従士団、廷臣団の指導者は、「国際的」になる、すなわち、種々の部属や民族の境界を無視するようになった。

■従士団、廷臣団の指導者は、またその構成員は、同様に彼らの財産を彼らの子供に遺贈し、彼らの血縁者に遺贈しなくなった、こうして、氏族を崩解させ、その氏族の犠牲によってその家族を高い位置においた。

7. エンゲルスの古代ゲルマン社会の分析はまったく複雑なものであることがわかる。制度としての私有財産の発生、社会的・経済的階級への結晶、

君主制国家の台頭、などへ進展する諸々の発展は、一部は経済的であり、一部は非経済的である。この変化の理解のために、ゲルマン人の歴史の研究が必要である。カエザルの「ガリヤ戦記」(51 B. C) の時代から、タキトゥスの「ゲルマーニア」(98 A・D) の歴史研究である。この150年間にゲルマン社会がなした構造的変化は（エンゲルスが初期に理解していたのであるが）、何らかの理論構成的定式化では適切に理解できないものではなかろうか？。何故に高度な共同体的ゲルマン社会が階級社会にかわっていったのかは、経済的あるいは「生産力」決定主義では説明できないのではなかろうか？

8. エンゲルスの分析について目立っているのは、彼が「生産力」にではなくて、「力」一般に割りあてた顕著な役割である。「マルク」すなわち、ゲルマンの共同体的制度の衰退そして、従士団の流行は、封建制度の形成をともなっていたのである。中世初期のたえまない戦争は、とエンゲルスは書いている。

「国の内外でのたえまない戦争は、きまって土地の没収に終わり、膨大な数の農民を零落させた。このため、はやくもメロヴィング朝時代に、土地をもたない自由民が非常にたくさんいた。カール大帝のたえまない戦争は自由農民身分の主力を打ち砕いた。はじめは自由民の土地保有者はみな軍役の義務があつて、自まえて武装をととのえなければならなかったばかりでなく、六ヶ月の軍役のあいだ自費で食っていかなければならなかった。すでにカール大帝の時代に実際に軍役に編入できたのは、5人に1人にもあたらなかったということは驚ろくにあたらない。彼の後継者たちの乱脈な統治のもとで、農民の自由はさらに急速に失われていった。一方では、ノルマン人の侵攻が引きおこした困苦や、国王たちのひつきりなしの戦争、豪族たちの私闘のため、自由農民はつぎつぎに保護主を求めないわけにはいかなかった。他方では、これらの同じ豪族と教会の貧欲がこの過程を促進した。詭計や、約束や、威嚇や、暴力を手段として、彼らはいっそう多くの農民と農民地を自分の権力に従属させた。どちらの場合にも、農民地は領主地に転化され、せいぜいよりよい場合で、賃租〔Zins〕や賦役

を代償として用益のため農民に返還された。だが、農民は、自由な土地保有者から賃租を払い賦役に服する隷農に、それどころか農奴にさえ変えられてしまった」¹⁴ (⑭『マルク』320 頁)

マルクスやエンゲルスにとって、あきらかなことは、封建的農奴制は、古い氏族的形態をかきまわして、軍統帥者とその他の軍事的指導者を、王や領主に転化させる戦闘と軍事的征服との産物であったということである。

生産力について

——マルクスは、この生産力に実際に因果の第一原因を割りあてたのであろうか——

1. われわれは、若干の批評家は、マルクスに、「生産力」あるいは技術決定主義の一つの形態を帰せしめていたのを、見てきた。そこで、他の生産様式を検討する前に、ここで立ちどまり、マルクスにとって、「生産力」は、ある種の不可避的な、歴史の第一動因であるかどうかという疑問を尋ねてみなければならない。

マルクスは、「序言」でも他のところでもこの歴史の技術論的解釈を支持しているようなやり方で自分の説を表明しているように見えるのはたしかである。たとえば、有名な『哲学の貧困』(1847) の文章がある。ここでマルクスは次のように述べている。

「手回し挽臼は諸君に、封建領主を支配者とする社会を与え、蒸気挽臼は諸君に、産業資本家を支配者とする社会を与えるであろう。¹⁵」(④ 134 頁)

多くの批評家はこのアフオリズムを文学的なものであると考えてきている。彼らはマルクスがこの本の 20 頁あとで紹介しているより注意深い定式化を知らない。

「労働は、それが使う用具の違いに応じて異なる様式で組織され、分割される。手回し挽臼は、蒸気挽臼の場合とは異なる企業を、前提している。」¹⁶（④ 154 頁）

ここでは、マルクスがいていた意味がはっきりわかる。生産の用具が変化すれば、分業が変化する。——しかし、かならずしも、全体としての社会の性質が、その階級構造すらが変化するわけではない。

同じようなことを、マルクスは『資本論』第一巻で書いている。

「死滅した動物種属の体制の認識にとって遺骨の構造がもっているのと同じ重要さを、死滅した経済的社会構成体の判定にとっては労働手段の遺物がもっているのである。なにがつくられるかではなく、どのようにして、どんな労働手段でつくられるかが、いろいろな経済的時代を区別するのである。労働手段は、人間の労働力の発達の測度器であるだけでなく、労働がそのなかで行われる社会的諸関係の表示器でもある」¹⁷（②a 資本論 1 a 236 頁）

こうして、マルクスは、労働用具の形態の変化に立脚するある種の「考古学」を提唱しているのであるが、あとでみるであろうが、あらゆるよい考古学がするように、道具からだけ、限定される推理が社会形態について行われるとマルクスは理解した。

2. 「生産力」は、この意味でマルクスにとって基本的である。生産力の発展の高さは一定の社会的構成体の発生にとって必要であるが必須の条件ではない。

「もし労働者が彼自身や彼の子孫の維持に必要な生活手段を生産するのに彼の時間の全部を必要とするならば、彼には第三者のために無償で労働する時間は残らない。ある程度の労働の生産性がなければ、労働者がこのように処分しうる時間はないし、このような余分の時間がなければ、剰余労働はなく、したがって資本家もなく、さらにはまた奴隷所有者も封建貴

族も、一口に言えばどんな大有産者階級もないのである」¹⁸ (㉓b 資本論 1 b 663 頁)

マルクスは書いている。

「生産は、使用価値を生産する基本的な過程である。これまでにわれわれがその単純な抽象的な諸契機について述べてきたような労働過程は、使用価値をつくるための合目的的な活動であり、人間の欲望を満足させるための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的条件であり、人間生活の永久的な自然条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである。」¹⁹ (㉓a 資本論 1 a 241 頁)

しかし、マルクスは同じパラグラフにおいてつけ加えている。

「小麦を味わってみてもだれがそれをつくったかはわからないが、同様にこの過程を見ても、どんな条件のもとでそれが行なわれるのかはわからない。たとえば、奴隷監視人の残酷な鞭の下でか、それとも資本家の心配そうな目の前でか、あるいはまたキンキナトウス〔古代ローマの将軍、隠退して耕作した〕がわずかばかりの土地の耕作でそれを行なうのか、それとも石で野獣を倒す未開人がそれを行なうのかというようなことはなにもわからないのである。」 (㉓a 資本論 1 a 242 頁)

「生産力」概念の適切な理解のためには、われわれは、資本主義的生産様式と前資本主義的生産様式の基本的な相異についてマルクスが行ったことを想起しなくてはならない。マルクスは書いている。

「現代資本主義的工業は、一つの生産過程の現在の形態をけっして最終的なものとは見ないし、またそのようなものとしては取り扱わない。それだからこそ、近代工業の技術的基礎は革命的なのであるが、以前のすべての生産様式の技術的基礎は本質的に保守的だったのである。」²⁰ (㉓a 資本

論 1 a 634 頁)

これは、マルクスが『共産党宣言』でおこなったのと同じ指摘であって、この著書でマルクスはのべている。ブルジョワジーは、生産用具を、したがって生産関係を、したがって社会的諸関係全体を、たえず変革せずには存立することができない。

「これに反して、古い生産様式をそのまま維持することが、これまでのすべての産業階級の第一の存立条件であった。」²¹（④ 478 頁）。

このような古い階段の一例が中世のギルドであって、ここでは、生産の伝統的なやり方が高度に価値あるものとされ、固守されたのであった。

3. 結論は疑う余地がない。マルクスにとって、前資本主義的生産様式は、保守的であった。生産力は歴史における不断にまた不屈な拡大力——つまり、社会がなしとげた歴史上の変動の主要な原因であると、「序言」のなかの定式を考えようとマルクスが志向したとはいえないということである。そして、もちろんこのことには、直接的な証拠は豊富である。マルクスとエンゲルスは、そのような支持できない観念を提唱しようとしていたのではない。『ドイツ・イデオロギー』のなかで台頭する封建制度の条件の討論で、マルクスとエンゲルスは次のように書いている。

「衰亡してゆくローマ帝国の最後の数世紀と蛮族そのものによる征服は大量の生産力を破壊した。農耕は衰え、工業は販路の欠如のためにすたれ交易はとだえるか、または無理やりに断たれるかし、都鄙の人口は減っていた。当時存在していたこの状態とこれによって条件づけられた征服組織のあり方がゲルマン的兵制の影響下に封建的所有を展開させることになった。」²²（③ 20 頁）

そして、このあとに続く文脈で、二人はつぎのように書いている。

「ある地方で獲得された生産力，ことに発明がその後，伸ばされることもないままに終わってしまうかどうかは，もっぱら交通のひろがりいかにかかっている。直接の近辺以上に出る交通がまだ全然，存在しないかぎり，発明の一つ一つはそれぞれの地方で別々になされねばならないのであって，蛮族の侵入といったようなたんなる偶発事，それどころか普通の戦争があるだけでけっこう，発達した生産力と需要をもつ土地でもはじめからやりなおさねばならない状態にされてしまう。歴史のはじめごろは一つ一つの発明が日々にあらたに，そして各地方ごとに独立におこなわれねばならなかった。貿易が相当に広範囲に及んでいる場合ですら，発達した生産力が全滅のおそれなしとしないことはフェニキア人がこれを証明している。彼らの発明の大部分はこの民族の貿易からのおい出し，アレクサンドロスの征服，およびその結果としての衰亡によって長いあいだどこかへいってしまったのだからである。同様に中世においてもたとえば，ガラス画がそうである。……交通が，世界的交通となって大きな工業を土台にもち，あらゆる国民が競争の渦中にひきこまれていてこそ，獲得された生産力は確実に保ちつづけられるのである。」²³ (③ 50 頁)

類似の指摘が，ローマ帝国の衰亡の条件の記述にさいして，エンゲルスによっておこなわれている。

「しかし，これは次の二つのことを証明したにすぎない。第一に，ほろびゆくローマ帝国の社会的編成と財産の配分とはその当時の農耕と工業の生産水準に完全に照応しておりしたがって，避けられないものであったこと。第二に，この生産水準はそれに続く400年のあいだに根本的に低下もしなかったし，根本的に向上もしなかったので，同じ必然性をもって，同じ財産配分と同じ住民諸階級とをふたたび生みだしたこと。」²⁴ (② 155 頁)

このような証拠にてらしてみれば，マルクスが，生産力が，普遍的で，永久に膨張する社会変動のてこであると見ていたと信ずる根拠はないことがわかる。現代資本主義工業と世界商業の時期だけに，生産力の固定した成長があった。なお，この解釈を支持する多くの証拠がある。

封建的生産様式について

1. ギリシアとローマの古代奴隷制の台頭、また、中世ヨーロッパの封建的秩序の台頭の問題について、マルクスとエンゲルスは、多様な要因を考察した。彼らは、経済的又は技術的要因だけで歴史的変動を説明しようとはしなかった。

2. ヨーロッパ社会の歴史では古代の遺物である家内奴隷制（chattel slavery）は、封建制度とよばれる一つの違ったタイプの組織に、やがて進んでいった。ローマ帝国の没落とともに半遊牧の農耕民は土に結びついていった。このことは、究極的には温帯の森林地帯の生産性を高めることになるが、しかし、マルクスは「生産力」の成長の結果として、封建制度の成立を説明しようとはしなかった。反対に、封建制の起源を、いくつかのきんみつにかかわりあった環境のなかに見た。——軍事的統帥者たちの多様性へのローマ帝国の解体、蛮族侵入過程と都市の没落の過程、これである。もともと、ローマ帝国の各州の生産様式は、土地の共同体的所有又は共同的権利に立脚していた。マルクスはノートしている。

「土地の一部分は自由な私的所有として、共同体の諸成員によって独立に管理され、他の部分——Ager publicus（公有地）——は、彼らによって共同に耕作された。この共同労働の生産物は、一部は凶作その他の災害のための予備財源として役立ち、一部は戦費や宗教費やその他の共同体支出をまかなうための国庫として役立った。時がたつにつれて、軍事関係や教会関係の高職者たちは共有財産といっしょに共有財産のための仕事を横領した。自分たちの公共地での自由な農民の労働は、公共地盗人たちのための夫役に変わった。それと同時に農奴制諸関係が発生した。」²⁵（②3a 資本論 1 a 308 頁）

夫役（corvée）は、農奴制とよばれる奴隷的制度を発生させた。「農奴制」²⁶は夫役（corvée）から発生したのだ。（②3a 資本論 1 a 308 頁）

3. マルクスとエンゲルスは、封建制度の形成について散見される特徴をとおして「力と暴力」の役割を強調している。それだけでなく、彼らは力の役割を無視し奴隸制から農奴制への移行をあいまいでない進化論的過程と解釈するかどうかで他の説を批判している。1882 年にエンゲルスは、『マルク』という論文を発刊したが、この本はその分析はドイツの有名な歴史家、ゲオルグ・ルードウィヒ・マウラー (1790—1872) の労作に拠っている。エンゲルスは、マウラーを賞賛しているし、彼への恩義を十分承知しているけれども、しかしマルクスへの手紙のなかで、マウラーの誤謬についても批判している。エンゲルスは論じている。

「強力とその役割とお彼があまりにもわずかしか考慮していないということ。それにしても、暗黒な中世以来改善の不断の進歩がおこなわれていたにちがいない、という啓蒙された先入観、これは、彼が現実の進歩の敵対的な性格を見ることだけではなく、個々の退歩を見ることを妨げているのだ。」²⁷ (35 105 頁)

4. エンゲルスは、マウラーとはちがって、強力 (force) や、敵対と退歩に対して正当な注意をはらっていた。農民の条件が 13 世紀の中頃に改良されていたとすれば、それは、十字軍のおかげであった。エンゲルスは書いている。

「総じて 13 世紀の中ごろに、農民にとって有利な、はっきりした転換が起った。この下準備をしたものは、十字軍であった。出征する荘園領主のうちには、彼らの農民を明文をもって自由にした者も多かった。別の領主たちは死亡し、滅びた。数百の貴族の家門が消滅し、その農民たちも同様に自由を獲得することがしばしばあった。」²⁸ (19『マルク』321 頁)

因みに、14 世紀と 15 世紀には、都市が急速に勃興して、富裕になった。農民の上に反対の影響を及ぼした。都市の工芸と奢侈は、とくに南ドイツとライン河畔で花を咲かせた。都市貴族 [Patrizier] のぜいたくを見て、粗食粗衣で不細工な家具を使っていた田舎貴族は、夜もおちおち眠れなかつ

た。エンゲルスは続ける。

「だが、こうしたけっこうな品物をいったいどこから手に入れたらよいのか？追剥はますます危険になり、成功しないようになった。しかし、ものを買うには金が必要であった。そして金を調達することができるのは、農民だけであった。そこで、農民の圧迫がまたもや始められ、賃租や賦役が強められ、またしても自由農民を隷農に、隷農を農奴に押しさげ、マルク共有地を領主地に変えることに熱中し、ますますそれを強行するということになった。」²⁹（⑩『マルク』321頁）

このやり方で、栄えた都市は荘園領主に市場経済を拡大することで利益を与えた、彼らに、彼らの農民の収奪を強化するよう促した。——彼らの農民からより大きな剰余を搾取するよう促したのである。

5. 初期封建時代の農民の共有地の横領が広がったにもかかわらず、共同使用のための未開墾の土地、森そして牧草地がドイツの多くの部分にのこっていた。これらの共有地を領主たちが横領したときに、初期15世紀の蜂起に農民たちをかりたてることになった³⁰（⑩322頁）。王子や領主によって農民が敗北してしまうと、新しい農奴制がドイツの農民のあいだにまたもや一般に優勢になった。エンゲルスは書いている。

「戦闘の修羅場となった諸地方では、それまでまだたもたれていた農民の権利がいまやますます恥しらずに踏みにじられた。農民の共有地は領主地とされ農民自身は農奴とされた。」³¹（⑩322頁）

そこえ、30年戦争の荒廃が農民の最後の抵抗力をうちやぶってやってきた、制限のない夫役が新らしく導入され、農奴制は一般化されて、フランス革命によって外部から紛糾されてしまうまで、続いたのである。

6. マルクスやエンゲルスにとって封建的農奴制の成立は、戦争やその他の歴史的イベントがふくざつにからんでいる複雑な過程であった。市場経済の

発生は、農民の負担を軽減するかわりに、正確な反対物をもたらした。両思想家にとって、とにもかくにも、古代社会から封建的農奴制への経過は直線的にではないということは論議の余地がない。

7. 歴史的には、封建制度はかんたんな生産用具と、家族や村落共同体の直接の需要のための生産と、また政治的に分散している体制と、それぞれ結びついていた。それぞれの荘園の領主は隷属民にたいして裁判官の機能をはたしていた。はじめは、市場目当の生産は存在していないか、僅少であった。そこから、理念型としての封建的生産様式は交換経済ではなかった。いつてみれば、荘園で生産されたものはまだ「商品」にならなかったのである。マルクスにとって、「商品」という概念は交換のためにあるいは市場のために生産された物品をいうのである。農民家族が家族の欲求と、領主に対して支払うべき年貢とをこえてさらに生産をしたときにだけ、交換が始まったのである。剰余の生産物が販売された。これらの生産物は諸商品になった。荘園領主には貨幣収入を提供した。都市では、職人たちが、はじめから、市場のために生産したことはそのとおりである。エンゲルスが観察したとおり、職人たちですら、

「彼ら自身の欲求の大部分を自分で満たした。彼らは自分の庭園と小さな地所をもっていた。彼らは家畜を共有の森林に放牧した。この森林はまた彼らに材木と薪木とを供給した。婦人はリンネル、ウールなどを紡いだ。交換目的の生産、商品生産はただ揺籃期にあったにすぎなかった。それだから、交換は規制され、市場は狭く、生産方法は安定していた」³² (20 281-282 頁)

エンゲルスは『反デューリン論』でつぎのように詳細に書いている。「中世の社会では、ことにはじめの数世紀には、生産は本質的に自家消費を目あてとしていた。それはおもに生産者とその家族の欲望をみたただけであった。農村のように、人身的隷属があったところでは、生産はまた封建領主の欲望をみたすことにも役立った。だから、この場合には、交換はおこなわれなかったし、したがって、生産物が商品の性格をとることもな

かった。農民の家族は、食料だけでなく、家具でも衣服でも、自分たちに必要なものはほとんどなんでも生産した。彼らが自分たち自身の需要と、さらに封建領主におさめる現物貢租とをこえて、ある剰余を生産するようになったときに、はじめて彼らは商品をも生産するようになった。つまり、この剰余が社会的交換のなかに投げこまれ、売りに出されて、商品になったのである。なるほど都市の手工業者は、そもそものはじめからすでに交換めあてに生産しなければならなかった。だが彼らもまた、自家需要品の大部分を自分の労働によって手に入れていた。彼らは菜園と小さな畑をもっていた。彼らは、自分の家畜を共同体の林に放し、そのうえこの林から用材や燃料を得ていた。また女たちは、麻や羊毛などを紡いだ。交換を目的とする生産、商品生産はようやく発生しかけたばかりであった。だから交換は限られており、市場は限られており、生産様式は安定していて、外に向っては地方的閉鎖性が、内に向っては地方的団結があった。農村にはマルクがあり、都市にはツunftがあった。』³²（281－282頁）

8. 封建制度のもとでは生産様式は安定していた。しかしながらやがて、「自然経済」、自給自足的な村落共同体のための生産は、交換経済にすすんでいった。マルクスの用語でいえば、はじめ「使用価値」だけしかなかった生産物は、いまや「交換価値」を獲得した。商品生産は成長する傾向になった。この時代についてだけ人は正当に、現在の「生産関係」と矛盾する「生産力」の成長について語ることができる。なぜなら、マルクスが歴史上最初の革命的生産様式に関係したのは、資本主義であったからである。しかしこの革命的な生産様式に注目する以前に、もう一つの保守的な生産様式を探求しなければならない。アジア的生産様式である。

アジア的生産様式について

——マルクス理論にとっての意義——

1. アジア的生産様式を概念を発展させるにさいし、マルクスは、イギリス古典派経済学者をおおいにあてにしていた。アダム・スミスはすでに記

録にとどめていた。アジアの政府のいくつかのあいだにある共通性は、これらの社会の複雑な灌漑と水規制のプロジェクトに関係しているようにみえる。マルクスは、古代エジプト、中国、インド³³の支配者の絶大な権力について言及している。ジェームス・ミル (James Mill) は、ヨーロッパ封建制度³⁴とは混同するべきでない明確な制度的類型として、「政府のアジア的モデル」を見ていた。リチャード・ジョン (Richard Jones) は、アジア社会の一般的な描写³⁵を提供したし、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) は、その社会を、比較の枠組みに位置づけている³⁶。

2. 他の思想家たちもまたアジア社会と政府の特殊性を、イギリスの古典派経済学者たちよりも早く記録にとどめている。たとえば、モンテスキュー (Montesquieu) は、その社会分類のなかに、アジア的「専制君主」 (Asiatic despotism) と呼ばれる一類型を含んでいた。これは、一つの類型である。ここでは、全ての社会集団は弱体であるので、この専制君主 (despot) に対する組織された抵抗は不可能であった。あらゆる人が、支配者にたいする隷属の条件では平等であった。マキャヴェリ (Machiavelli N. B) はトルコ帝国 (Turkish empire) とフランス王政 (Kingdom of France) によって例証される政府の二類型を対比していた。彼は、専制君主 (despotism) を明白に使用したわけではないが、彼の議論は、東洋の専制君主 (despotism) と封建制度 (feudalism) の間にある基本的な政治的相違 (the basic political differences) についてよく理解していたことを証明するものであった³⁷。

3. マルクスとエンゲルスがはじめて、アジアに対して持続的な注目をするようになったのは、1853 年であった。彼等の関心は、イギリスの中国・インドにおける植民地的侵略の行為によって促されたものであった。この時以来ずっと、マルクスは「アジアの様式」の概念にくわえて、「オリエント専制君主 (Oriental despotism)」、「アジア社会 (Asiatic society)」そしてさらにそういった名称を用いるにいたった。マルクスとエンゲルスの「アジアの様式」の概念は、二人の往復書簡、マルクスが執筆したニューヨーク・ディリー・トリビューンの数本の論文、両人の著書に散見される

多数の観察などから構成されたにちがいない。

4. マルクスからエンゲルス宛ての手紙、(1853年6月2日付)で、マルクスは、老フランソワ・ベルニエ (Francois Bernier) の『ムガル帝国の記述を含む旅行記』よりもすばらしいもの、より鮮明なもの、より適切なものを読むことができないといっている。「すばらしいもの」と記しているベルニエの作品の章句を引用して、マルクスは、東洋社会の明白な条件を記録している。「すなわち、国王が王国内のすべての土地の単独唯一の所有者である」と。マルクスはさらにすすんでつぎのように言っている。「ベルニエは、正当に、オリエントのすべての現象についての基礎形態を——彼はトルコやペルシヤやヒンドスタンについて語っている——土地の所有が存在しないということのうちに見いだしている。これこそがオリエントの天国に至るためにも現実の鍵なのだ。」³⁸ (28 210 頁)

5. エンゲルスのマルクスへの返答 (1853年6月6日付) のなかで、エンゲルスは同意している。「土地所有が存在しないということは、じっさい、オリエント全体への鍵だ」、しかし「オリエントの人々が土地所有に、封建的なそれにさえ、かわりをもたないのは、いったいどうしてなのだろうか?」と尋ねている。そして説明している。

「思うに、それは、主として地勢とも結びついている気候のせいだ。特に、サハラからアラビア、ペルシヤ、インド、タタライを横切って最高のアジア高地にまで連なっている大砂漠地帯と結びついている気候のせいだ。人工灌漑はここでは農耕の第一条件だ。そして、それは共同体か地方政府か中央政府かの仕事だ。オリエントの政府にはいつでも三つの部門しかなかった。すなわち、財政 (国内の略奪)、戦争 (国内および外国の略奪)、公共事業すなわち再生産のための配慮、という三つがそれだ。インドにおけるイギリスの統治は第一の部門と第二の部門とはいくらか実利的に規制したが、第三の部門はまったく顧みなかった。そして、インドの農業は衰亡におもむいている。自由競争はそこでは完全に恥をさらしている。このような人工的な土地の肥沃化は、水道が朽廃するとともにやんだのだ

が、このことは、以前はりっぱに耕作されている全地帯（パルミラ、ペトラ、エーメンの廃墟、エジプトやペルシアやヒンドスタンにおけるいくつかの地方）が今では荒蕪不毛になっている、という一見奇妙な事実を説明している。それはたった一度の劫掠戦争でも一国を数世紀にわたって無人の地となし、そこから全文明を剥ぎ取ることができた、ということの説明している。」³⁹ (28 214 頁)

6. マルクスは、エンゲルス宛の返答のなかでさらに分析を前進させている (1853 年 6 月 14 日付)。この手紙のなかで、マルクスは、そのアジアのこの部分の、経済的にいうと、停滞的な性格について強調し、二つの関連する事実によって説明しているのである。

「政治的な表面での無目的な運動にもかかわらず、アジアのこの部分が示している停滞的な性格を十分に説明しているのは、次のような二つの互いに支え合っている事情だ。(1)公共土木事業が中央政府の仕事だということ。(2)中央政府と並んで全国が、わずかばかりの比較的大きな都市を別とすれば、村落に分離されていて、これらの村落は完全に区分された組織をもっていてそれ自身で一つの小世界を形成しているということ。」⁴⁰ (28 220 頁) これらの村落についてある議会報告が引用されている。

「一つの村落は、地理的に見れば約 100 ないし 1000 エーカーの可耕地および荒地を包括する一つの地域である。政治的に見れば、それは一つの市区 (corporation) または町区 (township) に似ている。各村落は、事実上、別々の共同体または共和国であり、また、つねにそういうものだったと思われる。役員には次のようなものがある。(1)言語が違うのにしたがってポティル、ガウド、マンディル、等々と呼ばれるものは、住民の首長であって一般には村落事務の管理権を握っており、住民間の紛争を処理し、公安に留意し、村落内の収入を徴収する任務を行なう。(2)カーナム、シャンボグまたはバットワリーは、記録係である。(3)タリアリまたはスタルワーおよび(4)トティは、それぞれ、村落および農作物の見張方である。(5)ニアガンティは、川や貯水池の水を正しい割合で別々の耕地に分配す

る。(6)ジョシー、すなわち占星人は、播種や収穫の時期を告げ、また、すべての農作業のために日時の吉凶を告げる。(7)鍛冶職および(8)大工は、簡単な農具を作り、さらにいっそう簡単な農民の住居を作る。(9)製陶人は、村落の唯一の器具を作る。(10)洗濯人は、わずかばかりの衣服の清潔を保つ……(11)理髪人(12)銀細工師、これはしばしば同時に村の詩人や学校教師をも一身に兼ねている。それから神事のためのバラモン。このような簡単な自治体行政形態のもとでこの国の住民は大昔から生活してきた。村落の境界はまれにしか変更されなかった。そして、村落そのものは、ときには戦争や飢饉や疫病に襲われ、荒廃さえもしたが、同じ名称、同じ境界、同じ利害関係、そして同じ家族さえもが、長い年月にわたって存続してきた。』⁴⁰ (28 221 頁)

7. マルクスは、この村落と王との関係を議会報告を引用しながら記述している。

「住民は王国の崩壊や分割を意に解さない。村落はそっくりそのまま残るのだから、それがどんな権力に引き渡されようと、どんな君主に任されようと、彼らは意に介しないのである。村落の内部経済は変わることなく存続するのである。』⁴⁰ (28 221 頁)

マルクスはさらに続けて引用しているが、重大なコメントをしている。「思うにアジア的な専制と停滞とにとってこれ以上に堅固な基礎を考えることはできないだろう」⁴¹ (28 222 頁)

「ポテイルはたいてい世襲だ。これらの共同体のうちには、村落の土地が共同で耕作されるところもあるが、多くのところでは、各占有者が彼自身の土地を耕作する。同じ奴隷制と身分制とのなかで。未開墾地は共同放牧用だ。家内紡織は妻や娘によって行われる。これらの牧歌的な共和国は、ひたすらそれらの村落の境界を隣接にたいして用心深く見張っているのだが、近ごろやっとイギリス人のものになったばかりのインド北西部には、このような共和国が今なおかなり完全な形で存在している。思うに、アジ

ア的な専制と停滞とにとってこれ以上に堅固な基礎を考えることはできないだろう。そして、どんなにイギリス人がこの国をアイルランド化したとしても、この定型的な原始形態の破壊はヨーロッパ化のための不可欠の条件だったのだ。ただ徴税吏だけがこれを遂行すべき人だったのではない。それには大古以来の工業の破壊が必要であったのであり、この破壊がこれらの村落から自給自足的な性格を奪ったのだ。」⁴¹ (28 221-222 頁)

東洋的専制主義は、マルクスにとっても、一つのシステムであった。このシステムでは、全権力は、政治的至上権力者であり絶対主義的な土地貴族である皇帝の手中に集中している。皇帝の絶対主義的権力が依存しているのは、つぎの事実である。すなわち、無数の村落は多くの統一されていない原子のようなものであって、中央政府にたいして抵抗するよう氣勢をあげることもできない。村落は、真の土地所有権を持たないし、全面的に中央政府と、土地の固有のまた適切な灌漑の行政に依存していた。

8. どの中央政府も、公共の事業を行なう経済的機能を執行するアジア的生産様式と結びついていた。主な業務は、灌漑と排水、一口でいえば、土地の人工的な肥沃化の仕事であった。このような業務こそ、次の事実を明白に説明する環境である。マルクスはつぎのように書いている。

「インドではこれまでどんな政治の姿が変わったように見えても、その社会的条件は、最古の時代から変わることなく 19 世紀の最初の 10 年代にまでおよんだ。」⁴² (9 124 頁) (See Marx's article, "The British Rule in India", in *The New York Daily Tribune*, June 25, 1853, reprinted in Henry M. Christman, ed., *The American Journalism of Marx and Engels* (New York: The New American Library, 1966.), p. 97)

アジアの様式が掘り崩されたのは、イギリスの植民地的支配のもとにおいてだけであった。以前の支配者たちとは違って、イギリスはインドの公共の水利事業を完全に怠ってしまった。こうして農業の運命的な衰退の原因になった。

9. マルクスにとって、アジア的形態は、しつこくも、長期間、次の前提に依っていたのである。「……前提とは、個人がコムニオン（共同体）に対して独立していないこと、そこには、生産の自給自足的な周流（輪回）がある、農業と工業との統一体があるということである。」⁴³『要綱』（Grundrise p. 486, see also 473, 493）エンゲルスは、同じ点をその著書で指摘している。「アジアの村落共同体の自給自足はつぎのようなものであった。すなわち、東洋の専制政治も、征服者たる遊牧民族のつぎつぎの支配も、数千年にわたってこの古い共同体を少しもそこなうことができなかった」⁴⁴（② 168 頁）。エンゲルスは、他の文脈で続ける。「どれだけ多くの専制支配がペルシャやインドで興亡したにしても、それらのすべては、自分がなによりも河川流域の灌漑の総請負人であることをまったくはっきりと心えていた。この国々では灌漑をおこなわずには、農耕は不可能なのである。インドで、このことに気づかなかった最初の者は、開明したイギリス人であった。イギリス人は灌漑水路や水門を崩れるにまかせ、いまになってようやく、規則的に繰りかえす飢饉を見て、インドにおける彼らの支配をせめてその先行者たちの支配と同程度に正当なものとすることができたであろうただ一つの活動を、自分たちがなおざりにしてきたことを、発見しているのである。」⁴⁵（② 186 頁）

こうして、「古い共同体は、インドからロシアにいたるまで、それが存続したところでは、数千年このかた最も粗野な国家形態である東洋的専制政治の基礎となっている。」⁴⁶（② 187 頁）

10. マルクスとエンゲルスにとって、アジア的と封建的との二つの生産様式のあいだには鋭い対照があることを強調することは重要なことである。東洋的専制君主の支配は、真生の、土地の私的保有を排除した、エリエントを特徴づけるものがなにかあるとすれば、それは、国家の至上権であった。開明的で特権的な要素ですら、真生の土地貴族ではなかった。マルクスとエンゲルスが最もよく注意したこの二つの地域であるインドとシナには真の封建制度は存在していなかった。

——アジア的生産様式の理論的意義とは——

1. マルクスのアジア的生産様式概念はマルクスの理論と方法の理解にとって一定の意味があるということは、いままで上述してきたことから出てくるのである。つまるところ、アジアの様式とは、大古の昔から19世紀にいたるまでの様式の一つであるというのであれば、「生産力」は安定していて不変であったということの意味するにすぎない。このことだけでも、「生産力」の成長が普遍的な社会変動の源泉であるという理論（マルクスが「序言」で定置した）が誤謬であり広まった見解を論ばくするのに十分である。

2. マルクスは、直線的な発展の理論を提唱していたのではないということが、マルクスのアジア的生産様式概念から出てくるのである。たとえ、人が、マルクスは、実際には、社会進化あるいは社会発展の理論——われわれはあとで挑戦するであろう見解を提唱するのであれば、アジア的生産様式は一つの推論を認める余地がある。すなわち、マルクスとエンゲルスは、すくなくとも、西洋と東洋という二つの発展の路線を認識していたのであろう。

3. マルクスの歴史概念を普遍的、直線的な解釈であるとしてこれを拒絶するわれわれの立場は、マルクスが「序言」でおこなった一つの立場と調和しないようにみえるかもしれない。この序言の立場は、「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成体のあいつぐ諸時期として表示されうる。」(⑬7頁) この声明は、マルクスは発展の一路線のみを受けいれているという印象を伝統的に強めてきているというべきである。かかる印象は全く誤謬であるのは何故かを十全に理解するために、われわれは、資本主義、その起源、その発展についてのマルクスの見解をまず考察しなければならない。

——資本主義的生産様式——

1. 人は、正確に歴史過程の開始の日を日付することはできないことはいうまでもない。マルクスは、ヨーロッパの自然経済、つまり自給自足の荘園村落のための生産が交換経済によってしだいに置きかえられていくのは13世紀から14世紀であったという当時の大方の歴史家の同意見に依っていた。マルクスの用語でいうと、「使用価値」だけをもっていた生産物はいまは同時に「交換価値」を持つようになった。商品生産あるいは市場のための生産が成長する傾向になった。因みに、これはまだ資本主義ではなかった。むしろ資本主義のための準備段階であった。

2. マルクスにとって、貨幣と商品は、特殊な歴史的環境で資本に転化した。資本主義は次のことを必要とする。「二つの非常に違った種類の商品所持者が対面し接触しなければならないという事情である。その一方に立つのは、貨幣や生産手段や生活手段の所有者であって、彼らにとっては、自分が持っている価値額を他人の労働力の買い入れによって増殖することこそが必要なのである。他方に立つのは、自由な労働者、つまり自分の労働力の売り手であり、したがってまた労働の売り手である。」⁴⁷（②3b 934 頁）労働者は、二重の意味で自由である。第一の意味は文字どおり、第二の意味は皮肉の意味である。資本主義の理念型的な労働者というものは、奴隷や農奴などのように彼ら自身が直接に生産手段の一部であるのでもなければ、自営農民などの場合のように生産手段が彼らのものであるのでもなく、彼らはむしろ生産手段から『自由』であり離れており免れているという二重の意味で、そうなのである。言葉の二重の意味での「自由の労働」が欠けていれば、資本主義は発生できなかったであろう。

3. だから、資本主義的生産様式を創造する過程、その起源は、労働者を自分の労働条件の所有から分離する過程、すなわち、一方では社会の生活手段と生産手段を資本に転化させ他方では直接生産者を賃金労働者に転化させる過程以外のなにものでもありえないのである。資本主義はこうし

て、農業人口の労働者化を要求する。「労働者」はその手の労働以外のものを持たない。かかる社会経済的階級はどのようにして、いつ発生したのであろうか。

4. 14 世紀のおわりごろ、農奴はイギリスにはほとんど存在しなかった。人口の大多数は自由な農民的土地保有者から成っていた。彼らは、彼ら自身の生産用具をもって労働したし、彼ら自身の生産のために供給した。これらの農民的土地保有者は、共同用地の用益権をつかって、材木と薪とを供給した。そして、牧草を家畜に供給した。しかしながら、1 世紀のあいだに、事態は変化しはじめた。封建的領主の権力は君主によって減少させられてしまったから、王権は家臣団を打倒し、彼ら自身の資産をとりあげてしまうことは困難ではなかった。結果として、農民とヨーマンリーは、土地から追いだされてしまう。同時期に、より強力な封建的領主は大規模なプロレタリアートを、農民の強制的な犠牲と共有地の収奪とによって、つくりだしたのである。

5. その強制的な追いたては、経済的に条件づけられていた。大陸のウール製造はさかえていたが、逆に、このことが、イギリス・ウールの価格をいちおるしく引きあげた。マルクスは、新貴族を時代の子として描いている。新貴族にとって「…貨幣は権力中の権力であった」。耕地を羊の放牧地にかえることは、それゆえに、彼らの切なる願いであった。⁴⁸ 人間は羊によって追いだされてしまった。トマスモアは、彼の著書、『ユートピア』で、その惨情を描いた。彼は書いている。「羊が人間を食いつくす」⁴⁹ といっている。(23b 941 頁) 追い出された人々は放浪者として希望もなく全国をさまよい歩き、彼らの子孫は永久に、賃金労働者になっていった。

6. こうして、昔は農民の生産手段であったものは、今は、新しい貿易貴族や大農民の手中にある資本になった。彼ら自身の使用と消費のために農民によって生産されたものは、いまや生産の手段になり、それを、新しいプロレタリアートは、賃金のため労働を売ることによってのみ獲得することができるようになった。労働者は市場の力に従属する商品になってし

まった。自給自足的農民の土地財産を没収することは、彼ら自身の特有の農村家庭の産業を破壊しつくすことになっていった。

「紡錘や織機は、以前は広く農民に分散されていたのに、今では労働者と同じように、また原料とも同じように、わずかばかりの大きな作業場に詰め込まれている。そして紡錘も織機も原料も、紡ぎ手や織り手の独立な生存の手段から、今では彼らに命令し彼らから不払労働を吸い取るための手段に転化している。」⁵⁰（㉓b 974 頁）

マニュファクチュアはこうして、農業から分離した。そのときに、プロレタリアートの新しい階級は、発生する資本主義的生産様式のため国内市场を創りだしたのである。

7. 資本主義の第一段階は全く文字どおりの、「マニュファクチュア」であった。すなわち手工業生産であった。この段階の資本主義的生産は、ギルドの手工業生産から区別されるのは、一つの同一の資本家のもとに、多数の労働者が同時に雇用されるという点にあった。資本主義的マニュファクチュアは、こうして手工業から発生したのである。ある場合には昔はちがった手工業であったものを統合する。他の場合には、同じ手工業のメンバーを統合する。そこに、複雑な分業が発生して、それぞれの労働者は一つの単純な作業に従事するようになる。それゆえ、彼が手工業者として従事していた創造的特権から疎外されてしまう。一生涯同じ一つの単純な作業に従事する労働者は、自分の全身をこの作業の自動的な一面的な器官にしてしまう」⁵¹（㉓a 445 頁）ということである。労働者が創造性において失ったものは、組織が有効性において手にいれる。労働者は、いまや、多くの作業の全体を次々にやっていく手工業者にくらべれば、特殊な作業をやっけてのけるのにより少ない時間を費せばよいことになる。自分の専門機能をそれぞれ有っている多数の労働者の分業は新しい労働組織、資本主義的マニュファクチュアの基礎である。そのもとで、労働の社会的生産力は、大いに高まるのである。マニュファクチュアは「実際に組織労働者の巧妙さを生みだすのであるが、それは、すでに社会に存在していた職業の自然

発生的な分化を作業場のなかで再生産して、それを組織的に極度にまで押し進めることによって行なわれたのである。』⁵² (23a 445 頁)

8. 一つの作業場への多種の技巧と仕事の集中は、用いられる道具の変化を伴っていた。多くの作業に二三の道具を使用する手工業者とはちがって、労働者は専門的な作業に一つの道具を用いる。労働の世界に急激な変化が起きる。労働者の細部労働者への移行は、遠大な結果をもたらした。新しい産業労働の分業は効果的に、創造的な労働から労働者を疎外してしまった。こうして、人間存在としては、彼の価値を減少させてしまった。労働の新組織の高度の生産性は労働者を彼らの専門的な機能によって分類し、グループ分けすることによって可能となった。芸術的熟練、創造性、そして知性において、個々の労働者から奪いとられたものは、組織に与えられた。全体としての組織は、労働者を、彼の人間的才能から疎外させることで富んでいった。

9. 資本主義的発展のあとの段階である機械生産とともに、個々人の労働者は、彼の増大した生産性のためにより大きな犠牲をすら払う。マニュファクチュアは、いくぶんか、労働者の熟練に適合しているが、機械の体系は、それに労働者が適合することを強制する。生産そのものは一連の諸段階に分散され、その各々の段階は、機構の手段によって解決させる。資本家は、いまや、それぞれの段階が連続的であり、中断しないようにするよう生産過程に注意をおこたらない。一つの段階から他の段階への移行は手によってではなくて、機構によっておこなわれる。マルクスは書いている。労働者には、「前には一つの部分道具を扱うことが終生の専門だったが、今度は一つの部分機械に仕えることが終生の専門になる。』⁵³ (23a, 551-552 頁) マニュファクチュアでは、労働者が道具を使用する。工場では、機構が労働者を使用する。この環境の下では、労働者の知的・創造的な力は余分のものになってしまう。

10. 機械生産は、資本の集中をおおいに促進した。工場システムの優越に進んでいった。さらに、古い生産の形態は、近代資本主義的形態と資本の

権力とによって置き換えられていった。そこから、資本主義のもとでの生産力の拡張は、疎外の成長の表現であった。労働者が生産組織の成長に貢献すればする程、彼の創造的人間能力は喪失してしまう。彼の生産過程のコントロールの全部は喪失してしまう。この条件にたいするマルクスの革命的回答はよく知られている。労働そのものは、なくすことはできないであろう。人間がその真の生活を生産し、再生産する過程であるからである。しかしながら、疎外労働、搾取、抑圧は、人間の経験から排除できるであろう。この条件に直接に苦悩する人間はおそかれはやかれ、この条件はたえがたいものであることがわかり、彼らの抑圧者からあらゆる権力をもぎとるであろう。このことははじまりであるにすぎない。階級と階級矛盾とはしだいに廃絶され、人類はいつか次のような社会を創造するようになる。「各人の自由な発展が、万人の自由な発展の条件であるような一つの協同社会が現われる。」⁵⁴ (④ 496 頁)

11. 資本主義の発生と発展に関するマルクスの概念は、彼の理論の解明にとって基本的である。資本主義の時期だけにおいて、またそれへの移行だけにおいて、「生産力」はダイナミックな要素になる。西洋において、前資本主義的様式は、「保守的」(conservative)、であった。そして、アジア的生産様式では、「停滞的」(stationary)、であった。

12. それで、マルクスが、「序言」で、アジア的、古代的、封建的、そして近代ブルジョア的な生産様式を「あいつぐ諸時期」(⑬ 7 頁)として語るときには、彼がこの用語で伝えたい意味の全体は、これらは、人類文明史上主要な時期であったということである。「序言」の文脈での「あいつぐ」(progressive)は、古代メソポタミアとエジプトにはじまり、19世紀ヨーロッパの資本主義で絶頂に達する年代記的の時期の連続をいっているにすぎない。マルクスは、アジア的生産様式が、段階的に、資本主義に進化するといっているのではない。あるいは、マルクスは、「あいつぐ時代」は、必然的な段階であり、全ての社会はその必然的な段階を通過するべく運命づけられている必然的な段階であるといっているのでもない。

そこで、われわれは中心問題に対決する準備ができている。それは、マ

ルクスが、社会進化主義 (social evolutionism) あるいはその他の超歴史主義理論 (suprahistorical theory) に賛成していたのかどうかである⁵⁵。

(I. M. Zeitlin は、マルクスの歴史社会学論でつぎのように書いている。

By "suprahistorical" I mean a theory which, like social evolutionism, attempts to account for social change by means of laws of development that are immanent, objective, and inexorable.

内在的、客観的、不可避的な発展の法則ということであろうか。)

マルクスは社会進化論者であったかどうか？

1. この問に返えるためには、われわれは第一に 19 世紀の社会進化論の典型のいくつかを観察する必要がある。E・B・タイラー (Edward Burnett Tylor), L・H・モルガン (Lewis Henry Morgan), A・コント (August Comte), H・スペンサー (Herbert Spencer) その他多数の学者たちが、つぎのような理論に賛意をあらわした。人類は低い段階から高い段階に進歩してきたという理論である。疑いもなく、われわれは、これらの秀れた思想家の御恩を蒙っていることは大なるものがある。われわれはこれらの思想家たちから広い範囲の、人知と文化の知識の集積を得てきているからである。しかしながら、問題は、社会進化論は、科学的なのかどうかであろう。

2. たいていの 19 世紀の進化論的組織 (スキーム) は、共通して定式化されていてもいなくても、つぎの前提を含んでいる。すなわち、変化は自然な、直接的な、内在的な、連続的な、そして画一的な原因から発する⁵⁶。(Robert A. Nisbet, 『社会変動と歴史』 (New York: Oxford University Press), 1969. pp. 166 ff.)。この前提は、ヘーゲル、サン・シモン (そして、その弟子) コント、トックヴィル、スペンサー、モルガン、そして、デュルケームなどのいろいろの思想家も共有していた。ヘーゲルの場合、それは自由な世界精神の見方にあられていて、古代オリエントに開始し、今日のプロイセン国家において最高の形態をとるものであった。サン・シモンとコントの場合、その理念は、三段階の発展の法則の形をとる。

知識は、宗教的、形而上学的、実証的（科学的）段階を通過する。トックヴィルの場合、社会は平等の精神の具体化である。貴族政治から民主政治への進化である。スペンサーの場合、進化の方向は、相対的に同質的な「軍事型」社会から、複雑な「産業型」社会へである。モンガンは、社会発展の段階を、「野蛮」、「未開」そして「文明」の主要な三段階と考えていた。そして、デュルケームは、社会的連帯の問題を進化論的枠組に位置づけて、社会は機械的連帯から有機的連帯の段階に進歩するのが普通であると論じている。社会学思想史家である R・A・ニスベットが、有名な著書『社会変動と歴史』で強調しているとおり、上述のような進化論的理論は、「成長の陰喩（metaphor）であり、個人有機体の成長過程の変化にあわせて、社会の変化を類推したもの」⁵⁷（R・A・Nisbet）であった。

3. 成長、発展、進化の理念は 19 世紀に、どうしてそんなに普及したのだろうか。歴史家は、その答えをフランス大革命にたいするロマン的・保守的反動にもとめてきた。ヨーロッパのいたるところで、保守主義は、この社会的大動乱の結果を嘆き悲しんだ。彼らは、その社会的大動乱を革命家たちの狂気からくる大災害であるとみた。18 世紀の理念によった革命家どもが、その機械的に合理的な原理に従って社会を再組織しようとしたからだというのである。18 世紀の個人についての有頂天に対して、保守主義者たちは、集団、共同体そして民族を最高のものだとほめそやした。18 世紀の思想は機械的類推によって支配されてきた。ニュートンの宇宙はあやつり人形のようなものであり、人類すらが、機械と結びつけられていた。対照的に、19 世紀思想は有機体の陰喩を用いた。エドムンド・バーク（Edmund Burke）の政治哲学がよい例証である。社会を生命有機体であると主張しているのだから。

4. バークは、19 世紀の多数思想家たちのなかでちがった考え方をもったただ一人の人であった。その人の分析のカテゴリーは進化論的比喩によってていついてきに支配されていたからである。J. B. Bury はこれを「進歩の観念」と呼んでいた。彼は、17 世紀において最初の形態で発生し、19 世紀にその完全な表現に達した根本的に近代的な産物としてその理念を考え

ていた⁵⁸。進歩の観念は、ギリシヤ・ローマの古代の循環の理念とは鋭く対照の状態にある。

5. われわれは、進化論的理念の歴史的根拠について知識をもったので、19世紀の進化論的理論は、社会変動の客観的・進化論的説明とみなせるかどうかという問題に立ちむかうことができるようになった。R・A・ニスベット (Robert, A. Nisbet) に従って、社会変動を、「社会的実体をつらぬく時間における差異の連続」と規定するなら、そのとき、われわれは、否定形でこの質問に答えねばならない、というのは、われわれが関係している理論は、唯一の社会実体の変遷における一連の発展の段階を証明していないからである。理念型的には、進化論者は、段階の証拠を多様な社会、種々の歴史的時期から選択した。たとえば偉大な人類学者、ルイス・ヘンリ・モルガン (Morgan, Lewis Henry) は、ある社会を「野蛮」、第二の社会を「未開」、第三の社会を「文明」と例証した。多様な文化的時代と歴史的時期からデータを選択して、進化論者は、そのデータを西洋の実際の歴史的連続に似ている連続の形に配列したにすぎない。こうして、この思想の学派は、われわれに、唯一の社会実体の発展の実際のコースの理論を与えるのではない。—ニスベットは記録しているのであるが—

「動くフィルム of 形での一連の「スチール」(一コマ一コマ)を与えているにすぎない。実際の発展、成長、変化の幻想を創りだすものは眼の機能である。—この例でいえば、むしろ信ずるべき配列である。」⁵⁹

「あるいは、むしろ、この例でいえば、信ずべき傾向である。それは、博物館の陳列にまったく似ている。(通りすがりに観察できることは、文化的な人工の博物館での配列の原理は、文化の進化の原理のいちぢるしい影響なくしてはありえないということである。)私が見た最近のものは、『戦争の戦術』の発展の陳列であった。始めには、原理的な戦闘。例一槍弓や矢、そういったものが陳列されていた。最後のところでは、最近のもっとも恐ろしい戦争の形態(構成されたミニチュア)が展示されていた。中間には、理論的な連続性の原理にぴったり一致して構成されていて、地上のいかな

る時間にも発見され記述された武器の残像の全容又は配列があった。観察者は確信したのであろう。これは、まったく戦闘の発展のすべてを表現したものであろうと。しかし何処の戦闘の発展であるのか？ アメリカ合衆国でも、タスマニアでも、中国でも、あるいはチェリ・デル・フィゴまた、その他の具体的な、地理的に規定され、歴史的に限定された地域での戦闘でないことは、確かであろう。「発展」するところのものは、実際には、実在する、経験的な実態ではなくて、客体化された構成された実態でしかない。『戦闘の技法』と呼ばれているものにすぎない。」〔ニスベット (Nisbet), 1969 p. 197〕

これは、一つの批判である。社会進化論者はその理論の妥当性を証明するどころか、彼らの時代の支配的な知的・文化的観念にたいし表現を与えたにすぎない。進化論的理論と方法のどれも、進歩する発展の理念についての先入観に拠っているにすぎない。こうして、進化理論は、どうどうめぐりの病にとりつかれていて、克服されていない。ロバート・ニスベット (Robert Nisbet) やその他の学者たちは、このどうどうめぐりの進化論者のなかに、マルクスを含めていたというべきである。マルクスは、このようなカテゴリーに属するというのは、誤謬ではないのか？ それとも誤診だろうか。

6. マルクスとエンゲルスは、その独創性のゆえに、時代の進化論的観念に影響をこうむっていたことは、全く驚ろくにあたらない。事実、マルクスとエンゲルスとを進化論者に分類する学者たちは両人の著書にある進化論的思惟の明瞭な印を指摘して、その主張を擁護しているのである。両人の最初の共著である『ドイツ・イデオロギー』で、マルクスとエンゲルスは所有形態のいくつかの段階について記録している——部族的、古代的、封建的、資本主義的。この研究のためにわれわれがすでに言及してきた『序言』で、マルクスは、再び、「つらなっている諸時期」(progressive epochs) について語る。マルクスとエンゲルスは、諸段階の形で発展すると社会を見なしてきたということは、L・H・モルガンの古代社会論を情熱的に受け入れることで、またエンゲルスが、『家族、私有財産、国家の起

源』で、このモルガンの理論に厚い信頼をおくことで、さらに示唆されている。エンゲルスは、しばしば、進歩主義者の進化論的用語を用いていて、あきらかに、有機体と社会との進化の間に、ある平行があると見ている。1883 年のカール・マルクスの葬儀にさいし、エンゲルスは弔辞を述べているが、「ダーウィンが生物界の発展法則を発見したように、マルクスは人間の歴史の発展法則を発見しました」⁶⁰ (⑩ 331 頁) といっている。1888 年の『共産党宣言』の英語版の序文のなかで、エンゲルスは、マルクスの理念は、「ダーウィンの学説が生物学のために果したのと同じ仕事を歴史のために果すべき使命をもっている」(⑪ 361 頁) と予言している。歴史過程と進化論的生物学との類推は『資本論』でも見られる。1873 年の『資本論』の第 2 版への序文でマルクスは、述べている。「資本主義は……経過する歴史の段階である」そして、初版へのロシヤの評論家のものを引用している。この評論は、マルクスの仕事に賛辞をのべているのであるが、つぎのことを示めそうとしている。「……経済生活は、生物学の他の諸領域での発展史に似た現象をわれわれに示している。そうして、このような研究の科学的価値は、ある一つの与えられた社会的有機体の発生、存在、発展、死滅を規制し、また他のより高い有機体とそれとの交替を規制する特殊な法則を解明することにある。」(⑫a 22 頁) そして、マルクスは賛成の立場から、コメントをしている。「この評論家は、マルクスの弁証法的方法を正確に描写している」⁶¹ (⑫a 22 頁)。彼の時代のもっとも進んだ資本主義であるイギリス研究で、マルクスはまた次の示唆をしているのである。彼にとって、「未発展の社会」は究極的には、「より発展した社会」の条件を写しだす運命にある。

7. マルクスとエンゲルスは、彼らの理論にたいする広まった、一貫している誤解に若干の責任があることは、上述の言及にてらしてみれば、あきらかである。しかしながら、注意深く、偏見のない検討を両人の著書にたいしてするならばあきらかになるのだが、彼らの進化論的隠喩は修辞以上のあるものであるととるならば、これは、ひどいあやまりになるであろう。これは、いままでのところ、われわれの研究の結果としては疑問の余地がないからである。マルクスとエンゲルスには、低い段階から高い段階への

あいまいさのない一直線の進歩などはなかった。技術や「生産力」の概念でもそうだ。前進、上昇のような模型はなかった。そのかわりにあるのは、前資本主義の時期での、上昇、下降そして、ジグザグがあった。それはすぐれて保守的な生産様式であった。

8. さらに、アジア的生产様式論は、マルクスとエンゲルスに直線的な進化主義をなすりつけようとする何らかの意図を決定的にうちくだいてしまった。というのは

① 彼らのアジア的生产様式概念は、一つだけでなく、二つの発展の主要な路線を含んでいた。東洋のそれと西洋のそれである。

② アジア的生产様式は、停滞的であって、いわば、どんな社会経済的発展も全く実現してこなかった。

実際問題として、われわれは、マルクスとエンゲルスが普遍的で直線的な歴史概念を設定しようと志向していたことはないという直接的な証拠をもっている。『資本論』を論議したロシアの著述家ミハイロフスキーへの手紙のなかで、マルクスは主張していた。

「本源的蓄積にかんする章は、西ヨーロッパにおいて資本主義的経済秩序が封建的経済秩序の胎内から生まれでてきたその道をあとづけようとするだけのものであります。したがってそれは、生産者を生産手段から分離させることによって、前者を賃金労働者（ことばの近代的な意味でのプロレタリア）に、後者〔生産手段〕の所有者を資本家に転化させた歴史的運動を、叙述しています。」（⑩ 116 頁）

そこで、マルクスは熱情的にミハイロフスキーの試みを拒絶する。

「西ヨーロッパでの資本主義の創生にかんする私の歴史的素描を、社会的労働の生産力の最大の飛躍によって人間の最も全面的な発展を確保するような経済的構成に最後に到達するために、あらゆる民族が、いかなる歴史的状況のもとにおかれていようとも、不可避免的に通らなければならない

普遍的発展過程の歴史哲学的理論に転化することが、彼には絶対に必要なのです。しかし、そんなことは願いさげにしたいものです。(それは、私にとってあまりにも大きな名誉であると同時に、またあまりにも大きな恥辱というものです)。……したがって、いちぢるしく類似した出来事でも、異なる環境で起こるならば、まったく異なる結果をみちびきだすのです。これらの発展のおのをおのを別個に研究し、しかるのちに、それらを相互に比較するならば、人はこの現象を解く鍵を容易に発見するであります。しかしながら、超歴史的なことが、その最高の長所であるような普遍的歴史哲学理論という万能の合鍵によっては、けっしてそこに到達しえぬであります。』⁶² (19 117 頁)

9. ヴェラ・イ・ザスーリチ (Zasulich, Vera Ivanoura) (もう一人のロシアの著述家) への手紙において、マルクスは、同じ点を指摘している。

「資本主義的生産の創生を分析するにあたって、私は次のように言いました。『資本主義制度の根本には、それゆえ、生産者と生産手段との根底的な分離が存在する。……この発展全体の基礎は、耕作者の収奪である。これが根底的に遂行されたのはまだイギリスにおいてだけである。……だが西ヨーロッパの他のすべての国も、これと同一の運動を経過する』、だからこの運動の『歴史的宿命性』は、西ヨーロッパ諸国に明示的に限定されているのです。このように限定した理由は、第三二章の次の一節のなかに示されています。『自己労働にもとづく私的所有…は、やがて、他人の労働の搾取にもとづく、賃金制度にもとづく資本主義的私的所有によってとって代わられるであろう。』……こういうしだいで、この西ヨーロッパの運動においては、私的所有の一つの形態から私的所有の他の一形態への転化が問題になっているのです。これに反して、ロシアの農民にあっては、彼らの共同所有を私的所有に転化させるということが問題なのでしょう。……こういうわけで、『資本論』に示されている分析は、農村共同体の生命力についての賛否いずれの議論にたいしても論拠を提供していません。しかしながら、私はこの問題について特殊研究をおこない、しかもその素材を原資料のなかに求めたのですが、その結果として次のことを確信するようにな

りました。すなわち、この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点であるが、それがそのようなものとして機能しうるためには、まずはじめに、あらゆる側面からこの共同体におそいかかってくる有害な諸影響を除去すること、ついで自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要であろう、と」⁶³（19 238－239 頁）。

10. 上述の限定の光をあてて、マルクスの著述を検討すると、完全に明白になるのは、彼はいつも、資本主義の西ヨーロッパ起源に関する歴史的・特殊命題として社会経済的原因を強調することを考えていたことである。一般に諸社会に関係していたのではない。マルクスは何らかの社会的進化論にも、超歴史哲学的理論にも賛成していたのではない。マルクスが「経済的決定主義」にドグマ的にコミットメントしていたのではないことは、『フランスにおける階級闘争』や『ルイ・ボナパルトのブリュメル 18 日』のような著書をみるとすぐわかる。ここでは、マルクスの分析は、もっぱら、政治闘争と経済的事件に関係している。『ルイ・ボナパルトのブリュメル 18 日』の第二版の序文で、マルクスは、あきらかにしていることは、彼はあらゆる種類の厳密な決定主義を拒絶していたことである。ルイ・ボナパルトのクー・デタに関する小冊子の意図をあきらかにするため、マルクスは、自分の取扱い方と、ヴィクトル・ユゴー（Victor Hugo）とピエール・プルードン（Pierre Proudhon）のそれとを比較している。

「ヴィクトル・ユゴーは、このクーデタの責任発行人にむかって、^{しんらつ}辛辣な、気のきいた悪口をあびせかけているだけである。ユーゴの著書では、この事件そのものがまるで青天の霹靂のように見える。彼はこの事件を一個人の暴力行為としか見ていない。この個人が世界史上に類例のない個人的な主動力をもっていたとすることで、その人物を小さくせずに、かえって大きくしているのだということに、彼は気づいていない。⁶⁴ プルードンの方は、クーデターをそれに先だつ歴史的発展の結果として説明しようとしている。ところが、プルードンの著書ではクーデタを歴史的に構成してゆくことが、知らず知らずのうちにクーデタの主人公の歴史的弁護論に変わってしまう。こうして、彼は、いわゆる客観的編史家の誤りに陥ってい

る。私は、これとは違って、凡庸でこっけいな一人物が英雄の役割を演じることができるような事情や事件を、どのようにしてフランスの階級闘争がつくりだしたかを、証明しようとする。」⁶⁵ (10 352 - 353 頁)。

一口でいえば、ユゴーは、ポナパルトを、彼自身で歴史をつくる「偉大な人物」にかえる誤りをおかした。プルードンの方は、クーデタはあたかも運命的に決まっていたかのような反対の誤りをしてしまった。この二人に対してマルクスは、凡庸な人物がフランスの独裁者になることを可能にする社会・歴史的環境を分析したのであった。

11. 要約しよう。歴史の上昇・下向、前資本主義的生産様式の保守的性格、アジア的生産様式の意義、超歴史哲学的理論と運命的な被決定主義の歴史過程——これらの要因のすべては、マルクスには、「生産力」あるいはさらに、経済過程一般が他のあらゆることを規定すると論ずることを全く不可能にした。

12. それゆえ、われわれはつぎのように結論しても大丈夫であろう。マルクスはある種の厳格な決定主義を提案しようと考えていたのではない。マルクスは、あらゆる時に、あらゆる場所に通用する普遍的理論を前進させようと考えていたのではない。たしかに、マルクスの方法は、調査者に「生産様式」に正当な注意をはらうように申しつけている。しかしながら、マルクスは、どんなところでも、生産様式が社会の種々の形態の決定において普遍的で決定的な要因であると主張しているのではない。経済、政治、戦争、宗教あるいはイデオロギーあるいは、これやあれやの結合形態が変動の、あるいはある場合に非変動の決定因であるのかないのかは、厳格に、経験的歴史的調査の問題である。

13. マルクスの歴史・社会学的方法にあっては、歴史の第一原因である駆動力、「鉄の法則」、普遍的な必然的段階は存在しない。

マルクスの方法の主要な科学的目的は、経済と他のすべての社会の側面との多種多様な歴史的に変化する関係の探究を案内することにある。現代

の社会科学者が、マルクスの歴史社会学のみのりゆたかな要素（方法論的にも実質的にも）を発見することを可能にするのは、このようなマルクスの解釈ではなかろうか。

以上

NOTES

1. See William H. Shaw, *Marx's Theory of History* (Stanford, Calif. : Stanford University Press, 1978), and G. A. Cohen, *Karl Marx's Theory of History ; A Defense* (Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1978). The quoted terms may be found on p. 5 of Shaw's book and on p. 29 of Cohen's. (Hereafter all pagereferences to these works will be indicated in parentheses immediately following the quoted passage.)
2. Karl Marx, *A Contribution to the Critique of Political Economy* (Chicago : Charles H. Kerr, 1904), pp. 11-12.
3. Karl Marx and Frederick Engels, *Selected Works*, 2 vols. (Moscow : Foreign Languages Publishing House, 1951), Vol. II, p. 443. These volumes are hereafter cited as MESW.
4. MESW, Vol. II, p. 457.
5. Karl Marx and Frederick Engels, *The German Ideology*, Parts I and III (New York : International Publishers, 1947), p. 8, italics added.
6. Ibid., p. 9, italics added.
7. Karl Marx, *Grundrisse*, trans. Martin Martin Nicolaus (Middlesex, England : Penguin Books, 1973), p. 491, italics in original.
8. Loc. cit., italics added.
9. Ibid., p. 98.
10. Ibid., p. 472.
11. Frederick Engels, *The Peasant War in Germany* (Moscow : Foreign Languages Publishing House, 1956), p. 165. Engels's essay "The Mark" is in the appendix.
12. Loc. cit., italics added.
13. Frederick Engels, *The Origin of Family, Private Property, and the State* (New York : International Publishers, 1942), p. 131.
14. Engels, *The Peasant War in Germany*, "The Mark," p. 173.
15. Karl Marx, *The Poverty of Philosophy* (Moscow : Foreign Languages Publishing House, n. d.), p. 105.
16. Ibid., p. 127.
17. Karl Marx, *Capital*, Vol. I (Moscow : Foreign Languages Publishing

- House, 1954), pp. 179–80.
18. Ibid., p. 511.
 19. Ibid., pp. 183–184, italics added.
 20. Ibid., p. 486, italics added.
 21. MESW, Vol. I, p. 36.
 22. *Marx and Engels, The German Ideology*, pp. 11–12.
 23. Ibid., p. 141, italics added.
 24. Engels, *The Origin of the Family*, p. 141.
 25. Marx, *Capital*, Vol. I, p. 237.
 26. Loc. cit.
 27. Karl Marx and Frederick Engels, *Selected Correspondence* (Moscow : Foreign Languages Publishing House, 1953), p. 428, italics added.
 28. Engels, “The Mark,” pp. 174–75.
 29. Ibid., pp. 175–76.
 30. See Engels, *The Peasant Wars in Germany*.
 31. Engels, “The Mark,” p. 176.
 32. Frederick Engels, *Anti-Dühring* (Moscow : Foreign Languages Publishing House, 1954), p. 377, italics added.
 33. Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (New York : Modern Library, 1937), pp. 645ff., 687ff., 789.
 34. James Mill, *The History of British India*, 2nd ed., 12 vols. (London : Baldwin, Cradock, and Joy, 1820), Vol. I, p. 175ff.
 35. Richard Jones, *An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation*, (London : John Murray, 1831) , pp. 7ff, 109ff.
 36. John Stuart Mill, *Principles of Political Economy* (London : Longmans, Green, 1909), pp. 12ff.
 37. Niccolo Machiavelli, *The Prince*, trans. George Bull (Middlesex, England : Pen-guin Books, 1979), pp. 44ff.
 38. Marx and Engels, *Selected Correspondence*, pp. 98–99.
 39. Ibid., p. 99.
 40. Ibid., p. 102.
 41. Ibid., pp. 102–3.
 42. See Marx’s article, “The British Rule in India,” in *The New York Daily Tribune*, June 25, 1853 ; reprinted in Henry M. Christman, ed., *The American Journalism of Marx and Engels* (New York : The New American Library, 1966), p. 97.
 43. Marx, *Grundrisse*, p.486 ; see also pp. 473 and 493.
 44. Engels, *Anti-Dühring*, p. 224.

45. Ibid., p. 249.
46. Ibid., p. 251.
47. Marx, *Capital*, Vol. I, p. 714.
48. Ibid., pp. 718–19.
49. Ibid., p. 720.
50. Ibid., p. 746.
51. Ibid., p. 339.
52. Loc. cit.
53. Ibid., p. 422.
54. Marx and Engels, “Communist Manifesto,” *Selected Works*, Vol. I, p. 51.
55. By “suprahistorical” I mean a theory which, like social evolutionism, attempts to account for social change by means of laws of development that are immanent, objective, and inexorable.
56. See Robert A. Nisbet, *Social Change and History* (New York : Oxford University Press), 1969, pp. 166ff.
57. Loc. cit.
58. J. B. Bury, *The Idea of Progress : An Inquiry into Its Origin and Growth* (London : Macmillan, 1928).
59. Nisbet, *Social Change and History*, p. 197.
60. Marx and Engels, *Selected Works*, Vol. II, p. 153.
61. Marx, *Capital*, Vol. I, p. 19.
62. Marx and Engels, *Selected Correspondence*, pp. 376–79, italics added.
63. Ibid., pp. 411–12, italics added.
64. Hugo called his study *Napoleon the Little*.
65. Marx and Engels, *Selected Works*, Vol. I, pp. 221–22, italics added.